

# 外来種の現況と対策の方向性(第2回地域連絡会議提出資料(資料2-1))

種名	父島列島						母島列島						聳島列島				被害を受けている固有・希少種、その状況	対策の目標(1)	対策の進め方と方向性(1)	当面重点的に実施する(している)対策
	父	兄	弟	西	東	南	母	平	向	姉	妹	姪	聳	北	媒	嫁				
ノヤギ		着手済															固有・希少植物への食害、在来植生、土壌への被害。 (オオミトベラ、ナガバキブシ、ウチダシクロキ、シママラサキ、ウラジロコムラサキ、コヘラナレン、アサヒエビネ、ムニンツレサギソウ、オガサワラリュウビンタイ、メヘゴ、ムニンテンツキ、コヤブニッケイ、ムニンネズミモチ、ムニンナキリスゲ、など)	各島での「根絶」を目指す。	島全域からの根絶を、兄島 弟島の優先順位で進める。 父島では当面、防護柵などにより固有種・希少種などの保全を図る。その上で、兄島、弟島の対策後に、農業関連の他事業と連携しつつ、島全域からの根絶に取り組む。	兄島における根絶を目指して、駆除を継続する。 弟島における個体数半減を目指して、駆除に着手する。
ノネコ																	固有鳥類、海鳥類への食害、アカガシラカラスバトの捕食懸念。 (ハハジマメグロ、オガサワラカワヒワ、アカガシラカラスバト、カツオドリ、オナガミズナギドリ、など)	各島での「根絶」を目指す。 (当面は、保全上重要な地域からの「部分的な完全排除」を目指す。)	保全上重要な地域にノネコ侵入防止柵を設置し、固有種・希少種の保護を図る。 飼いやノネコの適正飼養の普及とノネコの抑制対策を進める。 兄島、弟島では、クマネズミ対策を中心に、ノネコ根絶を並行実施する。 父島、母島では、適正飼養の普及も含めた合意を進め、将来的には、社会的合意の上で、クマネズミ駆除とあわせて排除の推進を検討する。	部分排除を目指して重点地域(東平・南崎)に侵入防止柵を設置、柵内の生体搬出を行う。 母島での個体数を低減するため、生体搬出を実施する。 父島・母島において、適正飼養の普及啓発を実施する。
ノブタ																	固有昆虫、陸産貝類への食害、在来植生、土壌への被害。 (カタマイマイ類、オガサワラチビクワガタ、オガサワラネブクワガタ、アオウミガメの卵、など)	「根絶」を目指す。	ウシガエル駆除完了後、駆除に着手する。 警戒心の醸成による捕獲効率の低下が考えられるため、排除作業は短期間に集中して行う。 ノヤギ対策よりも、ノブタ対策を先行して行う(植生回復による排除作業の困難化の回避)。	根絶を目指して駆除を実施する。 植生、陸産貝類相、昆虫相回復のための対策(トンボ池整備等)を実施する。
クマネズミ																	固有・希少植物の種子への食害、鳥類との餌の競合、卵の食害。 (調査されていないため現状把握が不十分であるが、固有種、外来種を問わず、植物・植生への極めて影響は大きいと考えられる)	各島での「根絶」を目指す。 (父島、母島については、当面、保全上重要な地域からの「部分的な完全排除」を目指す。)	西島での研究成果や海外での事例を参考にして、根絶技術手法を検討・確立する。 保全上重要な属島(兄島等)において、根絶を目指した駆除を実施する。 父島、母島では、保全上重要な地域において、侵入防止柵等による部分排除を行う。	生息状況等の調査及び駆除方法の検討を行う。 聳島、東島において、先行試験的な根絶駆除を実施する。 部分排除を目的とした侵入防止柵の試験的整備を実施する。
グリーンアノール																	固有昆虫など小動物への甚大な食害。 (オガサワラシジミ、オガサワラセリ、ハナダカトンボ、オガサワラゼミ、オガサワラヒラタカミキリ、サトウオガサワラカミキリ、フタツメケシカミキリ、オガサワラヒバリモドキ、オガサワラオオアリ、オガサワラトカゲ、など)	各島での「根絶」を目指す。 (当面は、父島、母島での、保全上重要な地域からの「部分的な完全排除」を目指す。) 父島、母島から、属島への拡散を防止する。	父島、母島以外の全ての島への拡散を防止する。 特に、兄島、弟島、南島への拡散防止を徹底する。 父島、母島では、保全上重要な地域を「自然再生区」として設定し、アノールの侵入抑制、アノールの排除、保全対象の節足動物の保護対策を行う。	属島への拡散を防止するため、港周辺での駆除、監視、普及啓発を実施する。 自然再生区を母島(新夕日ヶ丘・南崎)に設定し、排除する。 希少昆虫相の回復方針を検討し、保護増殖対策(トンボ池整備等)を実施する。
オオヒキガエル																	地表面の固有・希少昆虫、陸産貝類への食害。 (ハハジマモリヒラタゴミムシ、ムニンツユムシ、ケズネケシカミキリ、サワダムシ、など)	父島、母島から、属島への「拡散を防止」する。 父島、母島での、保全上重要な地域からの「部分的な完全排除」を目指す。	父島、母島以外の全ての島への拡散を防止する。 繁殖阻止のため、防除フェンス等を用いて止水域への侵入を阻止する。 父島、母島では、保全上重要な地域を「自然再生区」として設定し、オオヒキガエルの個体群の縮小または完全排除を行う。	属島への拡散を防止するため、港周辺での駆除、監視、普及啓発を実施する。 自然再生区を母島(新夕日ヶ丘・南崎)に設定し、排除する。 希少昆虫相の回復方針を検討し、保護増殖対策(トンボ池整備等)を実施する。 (以上、グリーンアノール対策と併せて実施する。)
ウシガエル																	小動物への食害。 (固有トンボ類、オカヤドカリ、など)	「根絶」を目指す。	根絶を目指して駆除を継続する。(これまでの取組により、根絶近くまで個体数が減少している。)	駆除の継続及び生息状況のモニタリングを実施する。 希少昆虫相回復のための対策(トンボ池整備等)を実施する。
プラナリア(2)																	陸産貝類への甚大な食害。 (カタマイマイ、チヂミカタマイマイ、アナカタマイマイ、など)	父島から、母島及び属島への「拡散を防止」する。 父島の未侵入地区で、保全上重要な地域の「エリア防衛」を行う。	母島及び属島への土壌の搬入への対策(原則禁止など)。 母島及び属島への荷物の搬入への対策(冷凍処理など)。 母島及び属島への乗船前の靴底の洗浄対策。 父島の未侵入地区のエリア防衛に向けた技術的手法の検討・確立。	属島への拡散を防止するため、普及啓発等を実施する。 父島未侵入区域内の保全上重要な地域に保全エリアを設定し、エリア防衛する。 非意図的導入の現状把握と検疫等導入予防方策の検討を行う。
アカギ																	在来植生との競合、固有・希少植物の駆逐。 (湿性高木林、ウドノキ、シマホルトノキ、オガサワラグワ、セキモンウライソウ、ムニンドリシダ、セキモンノキ、オオヤマイチジク、など)	各島での「根絶」を目指す。	母島において緊急かつ重点的な対策を実施する。 自然度等からみた重要地域(湿性高木林など)、アカギの侵入が少ない林分、侵入箇所の外縁部などの対策効果が高い地域から優先的に駆除を実施する。	重点地域からの排除を目指して、駆除を実施する。 私有地における駆除を円滑に推進するため、駆除事業用地確保の手法を検討、確立する。 駆除を効果的、効率的に実施するため、分布量等の把握、駆除の進め方の検討を行う。
モクマオウ																	在来植生との競合、固有・希少植物の駆逐。 (岩上荒原植生、オオハマギキョウ、オガサワラアザミ、コヘラナレン、ウラジロコムラサキ、マツバシバ、シラゲテンノウメ、など) 地表面性動物の駆逐(生息地改変)(オガサワラハンミョウなど)	各島での「根絶」を目指す。	属島での駆除は、崖地など作業上困難な場所よりも、緩傾斜地等での作業を優先する。 海食崖上や急傾斜地の駆除にあたっては、実施の妥当性の検討や、漁業関係者との調整に留意する。	兄島の内陸部の頂部緩傾斜地周辺での部分排除を進める。 駆除を効果的、効率的に実施するため、分布量等の把握、駆除の進め方の検討を行う(リュウキュウマツもあわせて検討する)。
ギンネム、ヤダケ、その他外来植物																	在来植生との競合、固有・希少植物の駆逐。 在来動物の駆逐(生息地改変)	影響の大きな外来種に対しては、目標を定めて、各島での「根絶」を目指す。	侵入初期の属島など、早急な手当により効果が多いものについて対策を実施する。 Weed Risk Assessment(外来植物リスク評価システム)等により今後の侵入の予測を行い計画的な対処が必要。	聳島のギンネムなど、早急な手当を実施する。 Weed Risk Assessment(外来植物リスク評価システム)により今後の侵入の予測を行い、管理計画に反映する。 南島のシンクリノイガについては、ボランティアの活用等により根絶する。

固有種への被害は深刻  
固有種への被害は不明または軽微(現状把握不足、外来種衰退、など)  
× 当該の外来種は分布していない  
ほぼ駆除が完了(分布していない)

1 平成18年度環境省策定中「小笠原の自然環境の保全と再生に関する基本計画」に基づき記載。  
2 ニューギニアヤリガタリクスズムシ